

クルム伊達公子の引退前と復帰後におけるプレーの比較

A Comparative study of plays of the tennis player Kimiko Date Krumm: before retirement and after comeback

1K08B098-1 澤口 由季

担当教員 主査 太田 章先生 副査 土橋 登志久先生

【目的】

本研究の目的は、第一に現役引退後の自分のプレーの参考にする事である。41歳にして日本のトップに君臨するクルム伊達公子のプレーを参考に、自らのプレーの劣化を最小限に抑え、加齢やブランクに伴った新たなプレースタイルを見出していく参考にしたい。又、私の周りには、プロになった先輩やプロへの進路を決めた同期が多くいる。本研究により、若いプレーヤー達の勝利や成長及び今後のテニス界の発展のためのヒントを少しでも得たい。

【方法】

伊達選手の引退前と復帰後の試合の映像を見て、ライジングショットの数と確率を出す。其々の時代から5セットずつ抽出し統計する。ライジングショットは彼女の得意なショットであり、身体能力低下のカバーに適するショットでもあるため、使用する割合が増えているのではないかと予想した。引退前から復帰後にかけてライジングショットが増えていれば、仮説通りだといえる。

【結果】

ライジングショットの割合は引退前の11.7%に比べ復帰後は25.9%に増加していた。又、引退前はチャンスボールを打つ時やこちらから展開を仕掛ける時等、要所に取り入れていたが、復帰後は通常のラリー中にも積極的に取り入れ、早いペースで果敢に攻めていた。特に、復帰後は全体的にラリーのペースが早くなっていた。更に、試合を観るうちにバックハンドのスライスが増えていることに気づき、ライジングショットと同様に統計した。バックハンドのスライスは引退前の4.5%に比べ復帰後は9.0%に増加していた。又、バックハンドのスライスの使用はリターンゲームに集中していた。

【考察】

分析結果より、ライジングショットとスライスの割合が増え

ていることが明らかとなったため、ショットの使い方による戦術の変化が37歳での復帰後に高い戦績を出すことの出来る一つの要因であることがわかった。ライジングショットとバックハンドのスライスは、其々身体能力低下をカバー出来る性格のあるショットである。又、ライジングショットとバックハンドのスライスを併用することで強みは倍増する。タイミングを早めるショットと遅くするショットを混ぜることによって相手のタイミングを崩すことが出来、攻守にメリハリをつけることも出来る。つまり、決して身体能力低下のカバーのみを目的とした消極的な戦術ではなく、効率良く攻防し得点するプレーに繋がる戦術と言える。

この結果と考察を自分のプレーの参考にする上で、まず自分のプレーの分析を行い、その上で適すると判断したショットやショットの使い方を取り入れ、最終的に新たなプレースタイルを創造することが出来た。具体的には、フォアハンドは以前よりもライジングショットを積極的に取り入れる。得意なバックハンドではスライスは全く使っていなかったが、相手のペースを崩す程度にスライスを利用する。精神面では長いラリーの展開があまり好きではないので、スライスよりもライジングショットを多く取り入れ常に自分が好きな早いペースで試合を進めることが出来るようにしたい。又、プレースタイルを変えることにより練習内容も変わるので、今後の練習メニューについて再考した。今後、プレーの質を出来る限り落とさず生涯スポーツとしてテニスを楽しんでいきたい。

もう一つ、これからプロの世界で生きていく先輩や同期の活躍に多少なりとも寄与したいという目的があったが、本研究を進める中で彼女達と話す機会が多々あり、興味を持って聞いてもらうことが出来た。この研究が彼女達にとって役に立つかはわからないが、これからの日本の女子テニス選手の活躍を心から願っている。